

# 西南学院のキリスト教と人間科学部： 建学の精神とカリキュラム

深 谷 潤

Christianity in Seinan Gakuin and Department of Human Sciences :  
Spirit of Foundation, and Curriculum

Jun Fukaya

## はじめに

人間科学部のファカルティー・ディベロップメント (FD) において、私がこの場でお話することは、教育学的な観点から、大学の学部教育と西南学院の精神であるキリスト教との関係を明らかにすることです。しかし、この課題は決して理路整然と解決できるものではなく、個々人の教育実践の中で偶然に、一瞬感じ取れるような淡く、不確かな経験の中でしか実感されないものだと私は考えています。時間が限られていますので、手短にこれからお話しする内容の項目だけをあげます。最初に、大学の他の学部と異なる人間科学部の特徴、次に、西南学院における人間観とは何か。そこでは主に、キリスト教的人間観について説明します。三つ目に、スクール・モットーである「西南よ、キリストに忠実なれ」のエピソード、最後に建学の精神とカリキュラムについて説明いたします。

## 1. 人間科学部の特徴

西南学院大学における人間科学部の位置付けは、極めて大きいといえます。その理由は、単に学部の構成人数が多いだけではありません。その学問的内容に特徴があります。神をテーマとする神学部を除いて、他の学部は、人間の文化や活動に関する学問を対象にしますが、人間科学部だけは、人間そのものを

対象としています。児童教育学科は、人間の成長・発達を、社会福祉学科は、人間のケアや社会とのつながりを、心理学科は、人間の心を主に扱います。それぞれ学科の中でさらに細かく専門分野に分かれていますが、人間が細分化される存在としてではなく、一人の人格をもった全体として存在していることを忘れるべきではありません。そこには、必ずと言っていいほど、人間とは何か、という問いがあり、それに答える人間観があります。西南学院は、キリスト教に基づいた教育を行う機関であり、キリスト教の人間観に基づいた教育や保育の実践が前提となっています。ですから、人間科学部ほど、この人間観に結びついた学部はないわけです。学生たちは、キリスト教学やチャペルの時間を通じて、この人間観を学んでいるはずですが、教員はどうでしょうか。これについてすでにご存知の先生方も多いと思いますが、ここで簡単にキリスト教の人間観について説明したいと思います。

## 2. キリスト教の人間観

FDで授業をするつもりはありませんので、簡単に終わりたいと思いますが、キリスト教の人間観は、端的に二つの特徴で表せます。一つは、人間は神によって作られた存在であること。これを「被造物」といいます。旧約聖書の創造物語に、人間は土で作られた、とあります。(創世記2章7節)土で作られ、そして土にかえる存在である。被造物であるという点では、他の動植物と同じです。ただ、二つ目の特徴として、神に似せて作られた存在であることです。これを、「神の似姿」といいます。なぜ似せてつくったのか、それは、神は他の被造物と違って、人だけを特別に愛していたからだと説明されています。人と自然をあまり区別しない、日本的な生命観とこの点が大きく異なります。そして、神は人に他の動植物を管理する役割を与えました。人は動植物に名前を付け、管理するようになります。ここから、人は神に愛された存在であり、また、他の人も愛されているのだから、互いに愛し合いなさい、という黄金律が生まれます。この点が極めて重要です。つまり、だれでも神から愛されている存在であることを知ることが、私達に人間を超越した存在からの視点を意識させ、人間の平等の感覚をもたらします。さらに、エデンの園の話にもあるように、

神は人間に自由を与えました。その結果、誘惑に陥り、罪を犯しますが、神は人間を愛し、さらに赦しを与えました。人に自由を与え、赦す神の存在は、私達に対しても、他の人の自由を尊重し、許し合うことを要請します。このような自由、平等、愛の概念は、人間の普遍的な理念として近代以降大切にされてきたことは言うまでもありません。

西南学院の「キリストに忠実なれ」も、この文脈で言うなら、神に愛されていることを自覚し、人を愛しなさい！と読み替えることもできるでしょう。

### 3. スクール・モットー「西南よ、キリストに忠実なれ」

西南学院の理念としてしばしば登場する、C.K.ドージャー氏の遺訓「西南よ、キリストに忠実なれ！」は、「建学の精神」として解釈されてきた経緯があります。村上隆太元学長は、建学の精神は、「キリスト教」であり、スクール・モットーと区別する立場をとっていました。細かい議論はここでは不要だと思いますが、私は建学の精神を言葉で表現したのが、スローガンであるこのスクール・モットーだと思います。その背景について、ここで改めて説明します。

ドージャー夫妻の生涯を記録した学院創立80周年記念の冊子 SEINAN SPIRIT には、息子のエドウィン・B・ドージャー第9代学院長の一文が載っています。それによると、「父の一生のモットーと言い得るものは、フィリピの信徒への手紙3章の12節から14節であった。」と書かれています。

「(略) なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」こういう気持ちから、父は『西南よ、キリストに忠実なれ』と言ったにちがいないと思う。』

この「忠実である」ことの意味は、E.ドージャー氏によれば、“being faithful” のことであり、父ドージャーにとって「一生の中心的思想であった」そうです。息子E.ドージャーに対して、父は「実に厳しかった」。けれども、そ

れは「子どもを思う厳しさ」であり、「愛しているから厳しかった」と記されています。また、坂本重武（シゲタケ）第3代西南学院大学学長は、遺言は、

尚、余が夢寐（ムビ）の間も忘れ能はざる西南学院に、くれぐれもキリストに忠実なれと告げよを簡略化したものである<sup>2</sup>と述べています。彼によると、「キリストに忠実」であるとは、「自己に忠実」であることを意味し、さらにその「自己（わたし）」は、「キリストを土台」として「忠実に立てられた家」に喩えられています。<sup>3</sup>

この「Seinan, be true to Christ!」が発せられた背景は、1927（昭和2）年から表面化した日曜日問題があり、キリストに忠実でない西南学院が前提にある言葉ではないか、と考えられます。スポーツに熱心で、日曜日に礼拝を守らない<sup>4</sup>学生やそれを支持する教員を厳しく罰したドージャー氏は、西南を辞任することになりました。（1929年3月）学院を去った4年後に彼は亡くなります。遺言として、言うことを聞かない子どもを叱りつけるように、「忠実なれ！」といったのではないかと私は推測します。死ぬ直前の1週間前に、ドージャー氏の傍らにいたのは、福岡から小倉までわざわざかけつけたノン・クリスチャンの九州大学病院の先生だったと言われています。<sup>5</sup>建学の精神は、キリスト者だけではない、すべての人に対して開かれていることを示すエピソードです。

これまでドージャー氏の遺訓をどのように理解すべきか、いくつか試みはありました。

ドージャー氏の息子E.B.ドージャー氏による「神と人との誠と愛を」（Faith and Love to God and Man）<sup>6</sup>、また元院長L.K.シート氏による4L（Life, Love, Light, Liberty）（生命、聖愛、光明、自由）<sup>7</sup>や寺園前院長の「世の光」（マタイ5：14他）「地の塩」（マタイ5：13）など、<sup>8</sup>それぞれの言葉は、学院の精神を別の形で表現したものです。

さて、西南学院をはじめとして、キリスト教学校には、聖書がその思想の基

礎を形成し、建学の精神として教育理念を謳っています。ちなみに、本学院の教育目的は、寄附行為1章1条によると、「教育基本法、学校教育法に従い、キリスト教の主義に基づいて学校教育を行うことを目的とする。」(規定集 p.51)とあります。教育基本法が2006年に「改正」されたため、今後その目的の在り方に課題が残されます。<sup>9</sup>

#### 4. カリキュラムの中の建学の精神

建学の精神は、教育目的としてカリキュラムの中で具体的に展開されています。西南学院大学の場合、教育の特徴(あるいは柱)に次の4つをあげています。①キリスト教教育 ②国際性 ③少人数教育 ④語学教育・情報処理教育。カリキュラムの特徴ともいえるこれら4要素のうち、①のキリスト教教育が建学の精神と直結した内容をもっています。他の3つも関係は勿論ありますが、「キリスト教」とダイレクトな表現をとっているため、これだけ特別に説明がいります。

教育課程として目に見える形で具体化しているキリスト教教育には、主に4種類があります。卒業必修科目としての「キリスト教学I, II」、週3回のチャペルの時間、入学式・卒業式、クリスマス礼拝などの学校行事、そして学生・教職員らの宗教活動です。これらの活動が顕在化している間は、キリスト教学校としての建学の精神は、過去から継続しているといえなくもありません。問題は、目に見えないカリキュラム<sup>10</sup>に代表されるような、学校の雰囲気・スクールカラー、西南らしさ、ブランドという曖昧模糊とした空気です。この空気は、建物や施設の規模などにも大きく左右されますが、それ以上に重要なのが教職員の人間としての資質です。貴重な人格的出会いや啓発、様々な思い出深い出来事は、学生同士や教職員らの人間関係において生まれ、その舞台としてキャンパスが存在します。キャンパス自体の教育力<sup>11</sup>も確かにあり得ますが、やはり重要なのは大学の構成員です。場所が人を造ることもあり得ます。しかし、その場所をいつも整えるのはやはり、それにかかわる人間です。カリキュラムの内容は、科目の内容だけではなく、たとえて言えば、それを展開する舞台や演出する人間の質も大きくかかわってくるからです。それらがうまく連携し

合って理想的カリキュラムが形成されるのです。

したがって、広い意味でのキリスト教教育は、大学の教育全体を指しているとも言えます。キリスト教信仰をもたない教職員であっても西南の雰囲気、エートスを体に染みつかせている<sup>12</sup>人間であればだれでも、キリスト教教育の担い手であるといえます。

さて、科目のそれぞれの授業の中で目指される小さな教育目標（ねらい）は、一見、教育理念と無関係に思われますが、個々の目標は、科目全体の目的を細分化したものであり、その目的は、学科や学部を構成します。ちなみに、人間科学部の教育理念は、

キリスト教主義による人間教育の理念に基づいて、幅広く高い教養と人間に関する諸分野の学術的成果を修得させることによって、人間の生涯に亘る成長と発達についての深い理解、他者を受容し共感する能力、ならびに地域社会、わが国と世界についての主体的思考力と総合的な判断力をもった個人を育成するとともに、とりわけ教育、保育、福祉、心理の各分野において優れた働き手として貢献しうる専門家を養成することを目的とする。（学生便覧より）

となっています。

学部の目的は大学の目的の下部構造を形成し、大学の教育目的<sup>13</sup>と結びつきます。そして、大学の目的が、さらに建学の精神へとベクトルを伸ばしているのです。

逆説的ですが、理念は現実と切り離されているからこそ、現実を動かすことができるのです。理念は決して現実的な達成目標ではなく、達成の原動力を生み出すパワーです。教育目標を一つずつ達成することの積み重ねが、現実全体を静かに前進させていると言えるのです。比喩的には、理念には、太陽のような役割があると言えます。理念は、「達成」という形で実現するものではなく、何かの原則の基礎（原理 Prinzipien）を創りだす力と考えられています。<sup>14</sup>（カ

ント：理性概念の略としての理念 (Idee))。本学の建学の精神、すなわち教育理念とも言い換えられるものの原点は、「キリスト」ですが、キリストによって力を得ること、そのことをドージャー氏の遺訓が象徴していると言えます。

さて、カリキュラムの話と関連しますが、人間科学部は、大学の教養教育の多くを担っています。全学共通科目と呼ばれる科目群は、昔は一般教養科目とも呼ばれ、専門科目を始める前の準備教育的な役割を担わされていました。しかし、そのような位置づけは、教養教育の位置づけの一つに過ぎず、他にも「事象を科学的に探求する方法論を訓練する機能」であったり、「専門教育を総合する機能」という2つの機能があります。<sup>15</sup>

私の母校である国際基督教大学 (ICU) は、私が在学していた当時、教養学部一つだけの単科大学でした。いまでも中身は大きく変わりませんが、当時の先生方がよくおっしゃっていたのは、「広く浅く知識を身につけなさい。」ということでした。一般教養の先生方が、専門科目担当から軽視されるのは、この「浅く」の部分だと思います。けれども、この浅さは、新しい分野を開拓する上で欠かせない要素であることに、私は大学院生になるまで気づきませんでした。「浅さ」は、深い知識をもつものが、その学問のエッセンスをコンパクトにまとめたからこそその浅さであり、それ自体が、ものすごい密度をもったものであることがなかなかわからなかったのです。一つの学問の概論を初心者に解説するには、深い知識と洞察、幅広くしかも体系的な知識が実は要求されるのです。当時は、ICUに、社会科学の大家、大塚久雄や、国文学者の源了園、平和学の最上敏樹、科学哲学の草分け、村上陽一郎等、日本を代表する学者がいました。彼らは、一般教養の科目であふれるばかりの知識を学生たちに披露し、その広さと深さに私も学問の面白さと奥深さを感じることができました。一般教養を通じて、真理探求の面白さ、またその方法論の多様さを垣間見ることができたのです。ICUの大学教会の元牧師であり、神学者の古屋安雄は、教養教育で得られる知識は、突き詰めるとキリスト教的真理探求の基礎となる、と考えています。彼は、「宗教的真理は一部であるだけではなく、一般的知識の条件である」と述べています。<sup>16</sup> ICUと同じように、西南学院大学がキリスト

教の立場から真理探求を行うならば、現在の「全学共通科目」のめざすべきものも、基本的には同じものとなるでしょう。これは、国立国会図書館に掲げられている理念「真理が我らを自由にする」と同じといえます。この理念は、新約聖書のヨハネによる福音書（8章32節）の「真理はあなたたちを自由にする」に由来します。戦後間もなく、国立国会図書館法案の起草に携わった羽仁五郎議員が、ドイツ留学中に見た大学の碑文に、そのようにギリシア語で書かれていたところから発想を得たそうです。（国立国会図書館ホームページより）

## おわりに

建学の精神は、真理を誠実に探求する教師、すなわち研究活動に励み、その果実を教室で授業の中で展開する姿を通して、若者たちのこころを捉え、ゆさぶり、学問への興味を促すものであるはずです。それこそが、大学教員の教育の在り様だと思います。教育はサービス（奉仕）ではあるかもしれませんが、「サービス業」では決してありません。授業の中身を充実させるのは、学生へのサービスではなく、研究者としての自然な勤めの一つです。自らの好奇心を覚え、学生らにもそれを覚醒させること、それこそが、建学の精神を授業の中で実践することであると考えます。<sup>17</sup>

ドイツの実存哲学者ヤスパースは著書『大学の理念』のなかで、大学の重要な主な課題を挙げています。<sup>18</sup> その最初は、「大学は、共同体（研究者と学生）の中で真理を探求する課題を担うこと」であり、次に、「真理は伝授されるべきものであるため、授業は大学の第2の課題である」と指摘しています。つまり、大学教員は、研究し、それを伝えること、すなわち、研究活動を通して真理を求め、それを教育活動の中で学生たちに伝達していくこと、それが大学の理念であるといえます。<sup>19</sup>

キリスト教主義の大学において、真理とは世界の創造主であり、キリストです。そこから、直接信仰にいくルートが、従来強調されてきたクリスチャン・スカラー育成の立場ですが、それと同時に、ヤスパースのように、大学という共同体の基礎には、人格的な交わりがあり、その交わりを通して、真理探求が促進されることを、私はより大切に考えたいのです。

結論として、建学の精神は、その交わりが喪失され、学部、学科がばらばらになる危険性を回避することにこそ意義があるといえます。キリスト者もそうでない者も、研究者としてのプライドと真理探求の姿勢を忘れずにいることと、学生や教員同志の人格的交わりを大切にすることを「キリストに忠実なれ」の中に読み取ることができると私は考えます。

(本講演は、2017年8月2日に人間科学部 Faculty Development の一環として行ったものである。その内容は、「建学の精神の現代的意味—西南学院大学の理念を事例として—」西南学院大学人間科学論集第4巻第1号 2008年7月に基づき、人間科学部と教養教育の観点を加えて再構成したものである。)

#### <主な参考文献>

- ボルノー, O.F.(1999)『人間学的にみた教育学』(浜田正秀訳) 玉川大学出版部
- ドージャー, モード・バーク・(2002)『日本のC.K.ドージャー・西南の創立者』(瀬戸義毅訳) Maude Burke Dozier: *Charle Kelsey Dozier of Japan: A Builder of Schools*, Broadman Press, 1953
- 深谷松男 (2007)『新・教育基本法を考える』日本キリスト教団出版局
- 古屋安雄 (1993),『大学の神学』ヨルダン社
- Jackson, P.W.: *Life In Classrooms*, Teachers College Press, New York 1990 (1968)
- ヤスパース (1999)『大学の理念』(福井一光訳) 理想社
- カント (1985)『純粹理性批判 (中)』(篠田英雄訳) 岩波書店
- 西南学院『SEINAN SPIRIT C.K.ドージャー夫妻の生涯』, 西南学院創立 80 周年記念 2001 (1996)
- 潮木守一 (2007)「フンボルト理念とは神話だったのか」広島大学高等教育開発センター 大学論集第 38 集 pp.171-187

#### <註>

- <sup>1</sup> 西南学院 (2001), pp.99-100 cf.1951年7月7日発行「西南学院創立35周年記念誌」より
- <sup>2</sup> 西南学院 (2001), p.110 (1982年6月30日発行 西南学院大学広報より)
- <sup>3</sup> *ibid.*, pp.110-111
- <sup>4</sup> 野球や庭球などスポーツが盛んだった当時の西南学院は、日曜日に試合があることが少なくなかった。1928年7月の全国高専野球西部予選大会で、西南学院は、長崎高

商との試合（日曜日）をドージャー氏に内緒で行い、勝利した。その後、ドージャー氏の耳にはいり、準々決勝の対福岡高校戦に出場すれば、全員を退学処分とする厳しい姿勢をとり、学生らに同情の声が高まった。「ドージャーは試練の中で祈り、反省し、神のみ旨を求めたが、帰結するのは『キリストに忠実である』ということであり、他の回答を見出すことはできなかった。」(SEINAN SPIRIT, p.51)

<sup>5</sup> モード・バーク・ドージャー (2002), p.49

<sup>6</sup> 西南学院 (2001), p.98

<sup>7</sup> cf. SEINAN GAKUIN UNIVERSITY Prospectus for 2004 entry, p.9

<sup>8</sup> cf. SEINAN GAKUIN UNIVERSITY Prospectus for 2008 entry, p.6

<sup>9</sup> 深谷松男 (2007) pp.73-85 深谷松男は、建学の精神が神からの信託に基盤を置き、「教育基本法を越えて」いることの重要性を説いている。

<sup>10</sup> 潜在的カリキュラム (hidden curriculum) は、社会学者 Phillip W. Jackson の造語。彼の著書 "Life In Classrooms" Holt Rinehart & Winston 1968 に登場。

cf. Jackson (1990), pp.33-35

一般的に、教育課程は学校教育目標にそって意図的・計画的・組織的に行われる顕在的カリキュラム (manifest curriculum) を指す。それは、時系列的系統性 (sequence) と内容の広がりや深さ (scope) によって構成される。

<sup>11</sup> O.F. Bollnow は、家 (Haus) や雰囲気 (Atmosphäre) のもつ教育的意義を指摘している。cf. ボルノー (1999) 特に、第4章 教育的な雰囲気 (p.56-)、第8章 空間の人間学的な究明 庇護の空間としての家 (p.98-) 等を参照。

<sup>12</sup> 速水優氏 (聖学院名譽理事長、前日本銀行総裁) の講演 (「キリスト教学校で共に働く」) 第48回事務職員夏期学校 (2004年7月24-26日) ref.「キリスト教学校教育」2004年9月号 キリスト教学校教育同盟発行

<sup>13</sup> 西南学院規定集によると「本学は、キリスト教を教育の基本として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学術を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」(学則第1章総則第1目的第1条[昭和24年4月1日制定]) とある。

<sup>14</sup> カント (1985)、カントは、第2部弁証論の説明の前に、「純粹理性の概念」の「新しい名前」として「理念」(Idee) を定義している。それに引き続いて、第2部で「理念一般」「先験的理念」が説明されている。(p.30, 31-)

<sup>15</sup> 川瀬邦臣 (2001) 「教養教育の課題」教育思想史学会 『教育思想事典』勁草書房、pp.209-212

<sup>16</sup> 古屋 (1993), p.174

<sup>17</sup> 潮木 (2007)、p.178、潮木は、研究と教育は本質的に対立関係にあることを紹介している。「教えることのできる知識は、もはや研究を必要としない。まだ研究が必要な知識は教えることができない」 ref. Ben-David Joseph (1977), *Centers of Learning*, McGraw-Hill.

<sup>18</sup> ヤスパース (1999), p.11, 14 彼の大学の理念は、潮木から歴史学的事実に基づかない「フンボルト理念」を支持する立場として批判されている。cf.潮木 (2007)、p.182

<sup>19</sup> 学生もまた、教えられるだけではなく、自ら研究に加わることもフンボルトは伝えていると言われています。潮木 (2007), p.175

潮木によると「フンボルト理念」の基となった論文は、*Über die innere und äußere Organisation der höheren wissenschaftlichen Anstalten in Berlin* (unvollendete Denkschrift, 1809/10, Akad. Ausg. Bd.X; dazu verstreute Bemerkungen in Briefen und Aktenstücken)「ベルリンにおける高等教育機関の内的・外的構造」(1809/10年)という小さな論文の草稿であった。それが、世間に公開されたのは、1903年と言われている。cf.Gebhardt, Bruno (1903) *Wilhelm von Humboldts Politische Denkschriften*, 2. Bde.

西南学院大学人間科学部児童教育学科

